

いしをたぬ No.151

2006年6月

美輪(丸山)明宏氏の自画像と署名 (本館『芳名録』1969年9月12日来館 記帳)

丸山氏(後に、美輪に改名)主演の舞台劇「黒蜥蜴」は、1969(昭和44)年9月9日～11日、長崎市公会堂で公演され、丸山氏はその公演後に来館されたようです。

この作品は、原作江戸川乱歩で、三島由紀夫が戯曲化し、前年の1968年8月、丸山氏主演で映画化(監督 深作欣二、音楽 富田勲)され、好評を博していました。

舞台劇として、1969年の4月から東京・名古屋・京都・大阪で上演された後、長崎での「凱旋公演」が実現し、10月1日からは、東京での再演が予定されていました。

本館所蔵の9月10日付長崎新聞夕刊には、自身でデザインした舞台衣装を身につけた丸山氏の写真とともに、紹介の記事が掲載されています。

(この『芳名録』は本館4階展示室に、8月1日(火)から8月20日(日)まで展示します。)



も く じ

- ◎ 郷土資料案内シリーズ「芳名録」..... P 1
- ◎ おはなしフェスティバル in しまげら P 2
- ◎ 柳田邦男氏の講演要旨 P 3
- ◎ 長崎のエッセイスト明坂英二氏 P 4
- ◎ 館長新任あいさつ P 5
- ◎ 子どもの読書活動文科大臣表彰「時津図書館」・図書館講座PR・行事予定..... P 6



「ながさきおはなしフェスティバル in しまばら」を開催

延べ1,400名が参加！



（「小さい子の部屋」― 熱心に聴き入る子どもたち）

4月22日（土）、島原市の島原文化会館、森岳公民館を会場に「ながさきおはなしフェスティバル in しまばら」を開催しました。

当日は、雨天にもかかわらず島原市内を中心に1,400名もの参加をいただき、盛会の内に終了いたしました。

このフェスティバルは、平成13年度に定められた「子ども読書の日」を記念し、「読書を通して子どもたちの健やかな成長を願うとともに読書活動の推進を図る」ことを目的に、平成15年から県内を巡回して開催しております。

当日の午前中は、地元の小・中・高・大学生・ボランティア等による「絵本の読み語り（読み聞かせ）」や手あそび、紙芝居、人形劇、エプロンシアターなどを行い、親子づれや子どもたちが楽しい時間を過ごしました。

午後からは、ノンフィクション作家・評論家である柳田邦男さんを講師に招き、「絵本は人生の心の糧～子どもは子どもなりに、大人は大人なりに～」と題した講演をしていただきました。

このなかで柳田さんは「幼児期における絵本の読み語り、子どもの世界でメディア（テレビやゲーム等）と接する時間（仮想現実にいる時間）が増加



（会場内での実演）



（柳田 邦男さん）

する現代においては、とても大事である。絵本の読み語りは、親子の生身のかかわりを取り戻せるすばらしい手段である。絵本や物語の読書が言語力や思考力や感性を育て、子どもたちの心を耕してくれる。」と参加者に語りかけられました。

このフェスティバルは、来年度も会場を移して開催いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

柳田邦男氏講演

「絵本は人生の心の糧 ～子どもは子どもなりに、大人は大人なりに～」

(要旨)

午前中の森岳公民館での「おはなし広場」を見て、勇気づけられた。絵本や昔話の読み聞かせ、手遊びといった生身の語りかけに対する子どもたちの顔が、生き生きと輝いていたからである。ゲーム機などで遊ぶ顔とは別人であった。

情報環境の発達した今、1日に3～4時間もテレビ、ゲーム、メールで過ごす子がいる。生身の遊びをする子が少なくなった。アタッチメント（愛着：親が子どもに愛情を持ってかかわること）が少ない子ほど、ゲームに依存する傾向にある。そうすると、中学生くらいになっても心の発達が8、9才程度の状態で止まってしまい、現実・非現実（仮想現実）の区別がつけられない。また、ゲームの世界はボタン一つで思い通りになるため、自己中心的になる。さらに、自分の心が未発達、すなわち、「哀しみ」のような細やかな感情の分化・発達がないため、他者の心の痛みなどを共感的に理解することができない。いのちや心の問題を考えることは、子どもへのかかわり方や子どもの心の発達の問題を考えることへとつながる。

読書や幼児期における絵本の読み聞かせは、子どもの世界で電子メディア・映像メディアのウェイトが大きくなりすぎている今日、とても大事である。絵本の読み聞かせは、ぬくもりのあるアタッチメントそのものであり、親子の生身のかかわりを取り戻すすばらしい手段である。絵本を通して、子どもは子どもなりに、大人は大人なりに、心のもち方や人生の大事なことを感じ取る。絵本や物語の読書が言語力や思考力や感性を育て、子どもたちの心を耕してくれるのだ。

紹介された絵本

○きりのなかのはりねずみ

(ノルシュテイン ヤルブソヴァ こじまひろこ/訳)福音館書店

○ライオンのながいいちにち(あべ弘士)佼成出版社

○鹿よおれの兄弟よ(神沢利子 バヴリーシン)福音館書店

○よるくま(酒井駒子)偕成社

○だくちるだくちる、はじめてのうた

(阪田寛夫 長 新太)福音館書店

○もこ もこもこ(谷川俊太郎 元永定正)文研出版

○そらとぶアヒル(内田麟太郎 長 新太)童心社

○おじいちゃんの木(内田麟太郎 村上康成)佼成出版社

○月夜のみみずく

(ジェイン・ヨレン ショーエンヘル くどうなおこ/訳)偕成社

○てん

(ピーター・レイノルズ 谷川俊太郎/訳)あすなる書房

○ナビル、ある少年の物語

(ガブリエル・パンサン 今江祥智/訳)BL出版

○あの森へ(クレア・ニヴォラ 柳田邦男/訳)評論社

○せかいいちうつくしいぼくの村(小林豊)ポプラ社

○オスカーとフー(テオ ヴィット さくまゆみこ/訳)評論社

○スーホの白い馬

(モンゴル民話 赤羽末吉/絵)福音館書店他

○エリカ奇跡のいのち

(ルース・バンダー・ジー インノチェンティ 柳田邦男/訳)講談社

○だいじょうぶだよ、ゾウさん

(ローレンス・ブルギニョン 柳田邦男/訳)文溪堂

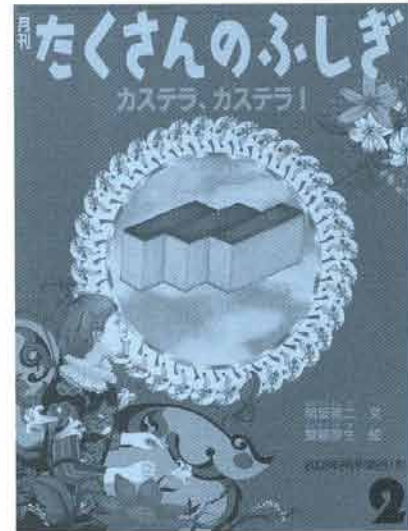
○おかあさんになるってどんなこと

(内田麟太郎 中村悦子)PHP研究所

遠い遠い水平線のむこうからやってきた
甘くてやわらかいカステラのものがたり
「カステラ、カステラ！」

作者の明坂英二さんに近著
「カステラ、カステラ！」
が生まれるまでを語っていただきました。

「カステラ、カステラ！」
月刊たぐさんのふしぎ '06.2月号
福音館書店刊 明坂英二 文
齋藤芽生 画



「カステラの海」から始まった。

「シルク・ロード」という言葉があります。ぼく自身「シュガー・ロード」と題する本を書いています。では「カステラ・ロード」はあるのだろうか。それは、ない。カステラの道はない。あるのは「カステラの海」だ、というのがぼくのなかにあるイメージです。

じっさい、大航海時代と呼ばれるあの世紀、ヨーロッパの地果て海始まるイベリア半島を発した南蛮菓子の文化は、アフリカ沿岸から喜望峰を回り、インド洋を越え、南シナ海、東シナ海を巡りめぐって、緑濃い九州西海岸の島陰にまでたどり着いたのでしたから。

とりわけ、長い航海のフィナーレとなった環シナ海海域は、文字通りの「カステラの海」でした。中国人、東南アジア各地の人々、日本人、そしてポルトガル人、海商から海賊までを含めてさまざまな海民が混交し交流し、ポルトガル語とマレー語のいり混ざった独特の言語さえあったというこの海域で、イベリアのスポンジケーキは変容し、いわば「現地化」していった。「和菓子カステラ」はその最後の変身ではなかったか、とぼくはにらんでいます。福建にも台湾にもカステラそっくりの菓子があります。「カステラの海」の産物です。

ですから今度の絵本の共作者が新進の画家、齋藤芽生さんと決まったとき、福音館書店の編集者Fさん、ぼくと3人の顔合わせで最初の打合せ事項が「まず平戸の海を見に行きましょう」だったのは、至極当然だったのです。

平戸港にヨーロッパという異質の文化とキリスト教という異質の宗教を荷下ろしした南蛮船が休息をとった川内浦の北東、川内峠の山頂に立つと、野焼きの跡が残る草原を越えて、春まだ浅いにび色の五島灘がひろがって見えました。その水平線の向こうが東シナ海です。カステラの海です。齋藤さんはただじっと見つめていました。それからスケッチブックに素早い手が動きはじめました。書き手と描き手。絵本づくりのコラボレーションが始まった瞬間でした。



明坂英二（あけさか えいじ）

エッセイスト

1931年、神戸市生まれ。早稲田大学仏文科中退。PR誌のエディター、ライターの仕事のなかで食の文化史にひかれる。著書『かすてら加寿底良』（講談社）『卵を割らなければオムレツはできない』（青土社）『オーヴンからの手紙』（同）、絵本『小さな卵の大きな宇宙』（福音館書店）など。

日本エッセイスト・クラブ会員。長崎市在住。

地域文化と図書館の役割

兼 俵 正 行



本年度の「ながさき おはなしフェスティバル」は、4月22日に島原市の森岳公民館並びに島原文化会館を会場として開催された。午前中は「おはなし広場」、午後からは柳田邦男氏を迎えての講演会であった。

当日はあいにくの悪天候にもかかわらず、親子連れなどで各会場は一杯となった。読み語り手は、42団体・個人である。熟練の技が光る大人のボランティアに加えて、緊張気味の小中高生にも大きな拍手が起きた。語り手によって、聞き手の反応が微妙に異なるのも面白い。絵本を通して語り手と聞き手の間に、ある種の結びつきや信頼関係が醸成されているのであろう。

柳田氏は講演の中で、絵本の持つ楽しさや面白さなどについてスライドを使ってわかりやすく紹介された。気がつくやうに大人が絵本の世界に魅せられてしまっているような楽しい時間であった。参加者全員が充足感を味わえた一日であったと思う。

本フェスティバルには、当初の予想を超えた人が集まり大きな盛り上がりを見せたが、それは地元の実行委員会の方々の早くからの準備もさることながら、読み語りのボランティア活動や読書グループなどの日頃からの地道な活動もその背景のひとつとなっているのであろう。個々の取り組みが集まって地域全体の大きな活動へと発展したよい例である。そして、こうした読書活動を支えている図書館の力も見逃すことは出来ない。特に、島原図書館は、昭和61年に開館され本格的な施設を備えた公共図書館として、地域の読書活動・文化活動になくてはならない存在となっているのである。

今社会は、20世紀型の工業社会から21世紀型の知識社会・知価社会へと急速に変革を遂げている。人々の生活や地域社会の在り方にとって、それぞれが持つ文化の違いがより大きな意義を持つようになった。

「読むことは、生きること」柳田氏の言葉である。読書は、自ら学び、自ら考えるなどの資質形成にかかわる生涯の生き方づくりでもある。そして、図書館は、個人の読書活動を支援するばかりではなく、家族や地域の文化形成に重要な役割を担う「住民の知的要求に伴走するランナー」（梅沢幸平滋賀県立図書館長）なのである。

ここに長崎県の図書館について気になるデータがある。長崎県民一人あたりの年間図書貸出冊数は、平成6年度1.28冊から平成16年度3.74冊へと着実に増えているが、残念ながら全国平均（4.86冊）には及ばない。また、市町立図書館については、その数は32あり、中には全国的にも誇れる施設、運営を行っている図書館がある一方、全体でみるとその蔵書冊数は県民1人あたり1.97冊（平成16年度、全国39位）である。

長崎県のどの地域でも均しく恵まれた読書環境が整えられるように、図書館間の横の連携にも努めている。県立図書館の巡回車や離島への宅配便を使った市町図書館への協力貸し出し（年間約3万冊）もその一つである。

これからも、図書館が地域の「知の宝庫」「文化の拠点」としての機能を発揮できるよう図書館間の連携を一層深めながら運営の充実を図らねばならないと考える。

平成18年度子ども読書活動優秀実践図書館として、文部科学大臣表彰を受賞された時津町立時津図書館をご紹介します。

「本との関わりを」

— 時津町立時津図書館の取り組み —

「うさこは、たべることがだいすきです。きょうはやまへくさつみにいこう。サラダにしようかな。それともおみおつけがいいかな・・・」

4月22日時津図書館で行われた「時津図書館子ども読書の日」のイベントの中の、「お父さんによる絵本の読み語り」の一コマです。幼児の皆さんもお父さんの語りになぞいたり、声を出して相づちを打ったりして話の中に入り込んでいきます。



お父さんによる読み語りは、子どもにも保護者にも大変好評のようです。これを機会に、家庭でお父さんによる読み語りが増えることを願っています。

また、町内3小学校の全学年を対象として、学校司書と図書館職員による「おはなしの出前」を行っており、ブックトークやストーリーテリングを通して、子どもたちに本の紹介や読書の楽しさやすばらしさを伝えています。

さらに、乳幼児を対象にしたおはなし会を本館、分館で毎月定期的に行ったり、夏休みには子ども講座として木工、科学遊び、手芸なども実施しています。

このような取り組みも、ボランティアの方々や学校のご理解とご協力があってこそできるものです。

今回の受賞をこれからの取り組みの励みとし、よりよい図書館づくりをしていきたいと思っています。

(館長 堤 繼治)

県立長崎図書館講座へ出掛けてみませんか

| | |
|-----|---|
| 第一回 | 7月1日(土) 13:30~15:30 講演「遠藤周作と長崎~その舞台創りと過程~」 長崎シーボルト大学教授 下野 孝文氏 |
| 第二回 | 9月9日(土) 13:30~15:30 対談「森澄雄 俳句のゆたかさ~遙かな時空を生きる~」 活水女子大学教授 田中 俊廣氏 俳句誌「杉」同人 田代 素人氏 |
| 第三回 | 11月25日(土) 13:30~15:30 講演「歌で巡るながさき」 元長崎新聞社論説委員 宮川密義(筆名 出島ひろし)氏 |

いろいろなことを学ぶ、身近な学習の機会です。あなたの参加をお待ちしています。

◎申込は不要です。直接会場へお越しください。
◎本講座はそれぞれ「長崎県民大学講座」の単位として認定されます。

場 所

県立長崎図書館
講 堂

平成18年度行事案内 (6月~10月)
8月 県立長崎図書館協議会 (本館)
9月 図書館実務研修会 (25日 本館)
10月 県図書館活動推進大会 (16日 時津町)

編集・発行 長崎県立長崎図書館(郷土課) 長崎市立山1丁目1番51号/印刷 (有正文社印刷所 長崎市魚の町6-6)
ISSN 1344-5235 ホームページアドレス www.lib.pref.nagasaki.jp

R100 この広報紙は、環境に配慮した再生紙を使用しています。